

俊寛

菊池寛

青空文庫

治承^{じしよう}二年九月二十三日のことである。

もし、それが都であつたならば、秋が更^たけて、変りやすい晩秋の空に、北山時雨^{しぐれ}が、折々襲つてくる時であるが、薩摩^{さつま}の沖遙かな鬼界^{きかい}ヶ島^{しま}では、まだ秋の初めででもあるように暖かだつた。三人の流人^{るにん}たちは、海を見下ろす砂丘^{さきゆう}の上で、日向^{ひなた}ぼつこをしていた。ほかほかとした太陽の光に浴していると、ところどころ破れほころびている袷^{あわせ}を着^あけていても、少しも寒くはなかつた。

四、五日吹き続いた風の名残りが、まだ折々水沫^{みなわ}を飛ばす波が

しらに現れているものの、空はいっぱいに晴れ渡って、漣さざなみのような白雲が太陽をかすめてたなびいているだけだった。そうした晴れ渡った青空から、少しの慰めも受けないように、三人の流人たちは、疲れ切った獣のように、黙って砂の上に蹲うづくまっている。康やすよ頼よりは、さつきから左の手で手枕をして、横になっている。

康頼も成経なりつねも俊寛しゅんかんも、一年間の孤島生活で、その心も気

力も、すっかり叩きのめされてしまっていた。最初、彼らは革命

の失敗者として、清盛きよもりを罵ののしり、平家の一門を呪い、陰謀の周密

でなかったことを後悔し、悲憤慷慨ひふんこうがいに夜を徹することが多かつ

た。が、一月、二月经つうちに、そうした悲憤慷慨が、結局鬼界ヶ島の荒磯に打ち寄する波と同じに、無意味な繰り返しに過ぎな

いことに気がつく、もう誰も、そうしたことを口にする勇氣も無くしていた。その上に、都会人である彼らに、孤島生活の慘苦が、ひしひしと迫ってきた。毎日のように、水に浸した乾飯ほしいや、生乾きの魚肉のあぶつたものなどを口にする苦しみが、骨身にこたえてきた。彼らは、そうした苦痛を圧倒するような積極的な心持は、少しも動かない。彼らは苦痛が重なれば重るほど、しよげきつてしまい、飯を食うほかは、天氣のよい日は海かい浜ひんの砂地で、雨の降る日は仕方なくその狭い小屋の中で、ただ溜息と愚痴とのうちに、一日一日を過していた。そのうちに三人とも激しい不眠症に襲われた。その中でも、神経質の康頼がいちばんひどかった。彼は、夜中眠られない癖がついてしまったので、昼間よく仮うたたね寝

をする。さつきからも、横になつたかと思うと、もうかすかない
びきを立っている。長い間、剃刀かみそりを当てない髯ひげがぼうぼうとし
てその痩せこけた頬おほを掩おほうている。その上、褪あせた唇したの下端したには、
涎よだれが今にも落ちそうに湛たたえている。

成経は成経で、妖怪もののけに憑つかれたような、きよとんとした目付
きで、晴れた大空を、あてどもなく見ながら、溜息ばかりついて
いる。俊寛は、一緒に陰謀を企てた連中の、こうした辛抱のない、
腑甲斐のない様子を見ると、自分自身までが情なくなる。陰
謀を企てた人間として、いますこしは男らしい、毅然きげんとしたところ
があつてもいい。刑罰のもとに、こうまでへこたれてしまわな
くつてもいいと思う。彼は、成経がもう一度溜息をついたら、そ

れを機会に、たしなめてやろうと思ひながら、じつと成経の顔を見据えていたが、成経はそれと悟つたわけでもあるまいが、くりと俊寛の方へ背を向けると、海の方へ向いたまま、これも少し、まどろむつもりだろう、黙り込んでしまった。

二人の友達が黙つてしまうと、俊寛の心も張合いが抜けたように、淡い悲しみに囚われる。彼にも、島の生活がたまらなく苦痛になつてきた。都へ帰りた。そうした渴きに似た感情で、胸を責められるその上、成経、康頼らの心持と、自分の心持とが日に増しこじれてくることを感じた。人間が、三人集まるときは、きつとその中の二人だけが仲よくなり、一人だけは孤立する傾きのあるものだが、今の場合には、それがことに激しかった。康頼も、

成経も、彼らの生存が苦しくなればなるほど、愚痴になつてくる。そして、過ぎ去つた謀反むほんの企てを心のうちで後悔しはじめ。人間はいかなる場合でも、自分を怨うらまないで、他人を怨む。そして、陰謀の発頭人であつた西光さいこうを怨む。ひいては西光といちばん親しかつた俊寛を怨む。彼らを、こうした絶海の孤島で悶もだえさせるのは、清盛の責任でなくして、本当は、西光が陰謀を発頭したためであるかのようなことをいう。西光の人格や陰謀の動機をよく理解している俊寛には、彼らのそうした愚痴が、癩しやくに触つて仕方がない。彼の神経は、日に増しいらいらする。そうして、何かのはずみから、つい気色けしきばんで、言い争う。二人は俊寛を煙たく思いはじめ。そして、剛腹な俊寛に一致して反抗の氣勢を示す。

そして、お互いに心持を荒すませる。

この頃、俊寛はよく、二人が意識して、自分を疎外しているのを感じる。硫黄いおうを採りに行く時でも、海藻を採りに行くときでも、よく二人きりで行ってしまふ。その上、三人でいるときでも、二人はよく顔を寄せ合つて、ひそひそ話を始める。そんなとき、俊寛はたまらない寂せきり寥ようと不快を感じる。三人きりの生活では、他の二人に背かれるということは、人間全体から背かれるということと同じことだった。俊寛は、そうした心苦しさを免れようとして、自分一人で行動してみようかと考えた。が、一日自分一人で、離れていると、激しい寂しさに襲われる。そして、意気地なく成経と康頼との所へ帰ってくる。そして再び、不快な感情のう

ちに、心を傷つけながら生活していく。

今朝も、鹿ヶ谷ししたにの会合の発頭人は誰だということ、俊寛は成経とかなり激しい口論をした。成経は、真の発頭人は西光だといった。だから、西光だけは、平相国へいそうこくがすぐ斬ったではないかといった。俊寛は、いな御身おんみの父の成親なりちか卿こそ、真の発頭人である。清盛が、御身の父を都で失わなかったのは、藤氏とうし一門の考えようを、憚はばかったからである。その証拠には、備前へ流されるとすぐ人知れず殺されたではないかといった。父のことを、悪しざまにいわれたので、日頃は言葉すくない成経も、烈火のように激して、俊寛と一刻近くも激しく言い争った。二人が、口論に疲れて、傷つけられた胸を懐きながら、黙ってしまうまで。

成経と康頼とが、横になつていゝいぎたない様子を見ていゝと、俊寛は意地にもその真似をする気にはなれなかつた。彼は、胸のうちの寂しさとむしやくしやした鬱うっかい懷かいとをもらすところのないままに、腕組をして、じつと考える。すると、いつもの癖であるように、妻の松の前や、娘の鶴の前の姿がまばろしのように、胸の中に浮んでくる。それから、京極の宿所の釣つり殿どのや、鹿ヶ谷の山莊せんせきの泉石せんせきのたたずまいなどが、髻ほうふつ髻ふつとして思い出される。都会生活に対するあこがれが心を爛ただらせる。たくさん使つていた下僕しもべの一人でもが、今侍かしずいていてくれればなどと思う。

俊寛が、こうした回想ふけに耽つていゝるとき、寝入つていたと思つた成経が急に立ち上つた。彼は、悲鳴とも歓声ともつかない声を

出したかと思うと、砂丘を海の方へ一散に駆け降りた。

彼は、波打際ぎわに立つと、躍るように両手を打ち振った。

「判官どの。白帆にて候ぞ。白帆にて候ぞ」

そういつて、康頼に知らせると、また悲鳴のような声をあげながら、浜辺を北へ北へと走った。

康頼も、あわただしい声にすぐ起き上った。俊寛も、白帆だときくと、すぐ立ち上らずにはいられなかったが、白帆が見えるといつて成経が浜辺を走ったことは、これまでに二、三度あった。彼はよく白雲の影を白帆と間違えたり、波間に浮ぶ白鳥から、白帆の幻影を見た。

康頼は、さすがにすぐ後に続いて走ったが、俊寛はまたかと思

いながら、無言のまま、跡からついて行つた。成経と康頼とは砂浜を根よく走りつづけた。俊寛も、彼らの熱心な走り方を見ると、自分の足並みが、いつの間にか、急ぎ足になるのをどうともすることができなかつた。

そのうちに、疑い深い俊寛の瞳にも、遙かかなたの水平線に、波に浮んでいる白千鳥のように、白い帆をいっぱい張りながら、折柄の微風に、動くともなく近づいて来る船の姿が映らずにはい
なかつた。

俊寛も、狂気のように走り出した。三人は半町ばかり隔りながら、懸命に走つた。お互いに立ち止つて待ち合わせる余裕などはなかつた。走るに従つて、白帆もだんだん近づいて来るのだった。

それは、九州から硫黄を買いに来る船のような小さい船ではなかつた。

成経は、感激のために泣きながら走っている。康頼もそうだった。俊寛も、胸が熱くなるしくなつて、目頭めがしらが妙にむずがゆくなつてくるのを感じた。見ると、船の舳へさきには、一流の赤旗がへんぽんと翻ひるがえつている。平家の兵船だと思つと、その船に赦免しやめんの使者が乗っていることが三人にすぐ感ぜられた。

船は、流人るにんたちの姿を見ると、舳を岸の方へ向けて、帆をひたひたと下ろしはじめた。やがて、船は岸から三反よつことない沖へ錨いかりを投げる。三人は岸边に立ちながら、声を合せて欣びよろこの声をあげた。さすがに、俊寛をも除外しないで、三人は、手を取りあつたまま、

声をあげて泣きはじめたのである。

二

船は、流人たちの期待に背かず、清盛からの赦免の使者、丹たんざ左衛門尉基康えもんのじようもとやすを乗せていた。が、基康の持つていた清盛の教書は、成経と康頼とを天国へ持ち上げるとともに、俊寛を地獄の底へ押し落した。俊寛は、狂気のように、その教書を基康の手から奪い取って、血走る目を注いだけれども、そこには俊寛とも僧都そうずとも書いてはなかつた。俊寛は、激昂のあまり、最初は使者ののしを罵った。俊寛の名が漏れたのは、使者の怠慢であるといいつの

った。が、基康が、その鋒^{ほうぼう}鋌^{とう}を避けて相手にしないので、今度は自分を捨てて行こうとする成経と康頼に食つてかかった。そして、成経と康頼とを卑怯者であり、裏切者であると罵倒した。成経が、それに堪えかねて、二言^{こと}三言^{こと}言葉を返すと、俊寛はすぐかっとなつて、成経に掴^{つか}みかかろうとして、基康の手の者に、取りひしがれた。

それから後、幾時間かの中の俊寛の憤りと悲しみと、恥^たとは諭^たえるものもなかった。彼は、目の前で、成経と康頼とがその垢^{あか}じみた衣類を脱ぎ捨てて、都にいる縁者から贈られた真新しい衣類に着替えるのを見た。嬉し涙をこぼしながら、親しい者からの消息を読んでいるのを見た。が、重科を赦免せられない俊寛には、

一通の玉章たまずさをさえ受けることが許されていなかった。俊寛は、砂を噛み、土を掻きむしりながら、泣いた。

船は、飲料水と野菜とを積み込み、成経と康頼とを収めると、手を合わせて乗船を哀願する俊寛を浜辺に押し倒したまま、岸を離れた。

そして、俊寛をもつと苦しめるための故意からするようになり、三反ばかりの沖合に錨を投げて、そこで一夜を明かすのであった。俊寛は、終夜浜辺に立って、叫びつづけた。最初は罵り、中途では哀願し、最後には、たわいもなく泣き叫んだ。

「判官どの、おう！ 今一言申し残せしことの候ぞ。小舟なりとも寄せ候え」

「基康どの、僧都をあわれと思おぼしめ召さば、せめて九国の端うでくまでも、送り届け得させたまえ」

が、俊寛の声は、渚なぎさを吹く海風に吹き払われて、船へはすこしもきこえないのだろう。闇の中に、一の灯もなく黒くもや纏もっている船からは、応という一声さえなかつた。

夜が更ふくるにつけ、俊寛の声は、かすれてしまった。おしまいは、傷ついた海鳥が泣くようなかすかな悲鳴になつてしまった。が、どんなに声がかすれても、根よく叫びつづけた。

そのうちに、夜はほのぼのと明けていった。朝日が渺びようびよう々たる波のあなたに昇ると、船はからからと錨を揚げ、帆を朝風にばたばたと靡なびかせながら巻き上げた。俊寛は、最後の叫び声をあげ

ようとしたけれども、声はすこしも咽喉のどから出なかつた。船の上には、右往左往する水夫かこどもの姿が見えるだけで、成経、康頼はもとより、基康も姿を現さない。

見る間に船は、滑るように動き出した。もう、乗船の望みは、すこしも残つてはいなかつたが、それでも俊寛は船を追わずにはいられなかつた。船は、島に添いながら、北へ北へと走る。俊寛は、それを狂人のように、こけつまろびつ追つた。が、三十町も走ると、そこは島の北端である。そこからは、翼ある身にあらざれば追いかけることができない。折から、風は吹きつのはらつた。船の帆は、張り裂けるように、風を孕はらんだ。船は見る見るうちに小さくなつていく。俊寛は、岸壁の上に立ちながら、身を悶えた。

もう声は、すこしも出ない。ただ、獣のように岸壁の上で狂い回るだけだった。

船は、俊寛の苦悶などには、なんの容赦もなく、半刻も経たないうちに、水平線に漂ただよう白雲のうちに、紛れ込んでしまった。船の姿を見失ったとき、俊寛は絶望のために、昏倒こんとうした。昨夜来叫びつづけた疲労が一時に発したのだろう、そのまま茫として眠り続けた。

彼は、その岸壁の上で、昏倒したまま、何時間眠っていたかは、自分にも分からなかった。一度目覚めたときは、夜であった。彼は、自分の頭の上の大空が、大半は暗い雲に覆われて、そのわず

かな切れ目から、二、三の星が瞬またたいているのを見た。彼は激しい
渇きと、全身を砕くような疼とうつう痛を感じた。

彼は、水を飲みたいと思いつながら、周囲を見回した。が、岸壁
の背後は、すぐ礮ぎょうかくな山になっているらしく、小川とか泉と
かが、ありそうに思えなかった。それでも、激しい渇きは、彼を
一刻もじつとしていさせなかった。彼は、寝ていた岩から、身を
剥はがすようにして立ち上った。立ち上るとき、身体のもろもろの
関節が、音を立てて軋きしるように思った。彼は、それでも這はうよう
にして、岸壁を降りることができた。彼は昼間（それは昨日であ
るのか一昨日であるのか分からなかったが）夢中で走つた道を、
二町ばかり引返した。彼は、昼間そこを走つたとき、榕ようじゆ樹が五、

六本生えていて、その根に危く躓つまずきそうになつたのを覚えていた。彼の濁にごつてしまつてゐる頭の中でも、榕樹の周囲を探せば水があるかも知れないという考えが、ぼんやり浮んでいた。

が、榕樹の生えてゐる周囲を、海の水あかりで、二、三度探して回つてみたけれども、そこらは一面に唐竹からたけが密生してゐるだけで、水らしいものは、すこしも見当らない。俊寛は、その搜索に残つてゐた精力を使いつくして、崩れるように地上へ横たわると、再び昏々として眠りはじめた。

二度目に目が覚めたとき、それは朝だつた。疲れしな萎びてゐる俊寛の頬にも、朝の微風が快かつた。彼が目を開くと、自分の身体の上に茂り重つてゐる蒼々そうそうたる榕樹こすえの梢を洩こぼれたすがすがしい

朝の日光が、美しい幾条の縞しまとなつて、自分の身体に注いでいるのを見た。さすがに、しばらくの間は、清らかな気持がした。が、すぐ二、三日来の出来事が、悪夢のように帰つてき、そして激しい渴きを感じたので、彼はよろよろと立ち上つた。それでも、縹ひょうようびようむへんざいと無辺際に広がっている海を、未練にももう一度見直さずにはいられなかつた。が、群青色ぐんじょういろにはろばろと続いている太平洋の上には、信天翁あほうどりの一群が、飛び交こうているほかは、何物も見えない。成経や康頼を乗せた船が、今まで視野の中に止つているはずはなかつた。

彼が再び地上に身を投げたとき、身を焼くような渴きと餓えとが、激しく身に迫つてきた。

彼は、赦免の船が来て以来、何も食っていないのだった。基康はさすがに彼をあわれがって、船の中で炊いだ飯を持って来てくれたのであるが、曠^{しんい}恚^いの火に心を焦^{こが}していた俊寛は、その久しぶりの珍味にも目もくれないで、水夫^{かこ}の手から、それを地上に叩き落とした。むろん、今でも自分の小屋まで帰れば乾飯^{ほしい}もたくさん残っている。が、俊寛には一里に近い道を歩く勇氣などは、残っていないかった。

激しい渴きと餓えとは、彼の心を荒^{すさ}ませ、自殺の心を起させた。彼は、目の前の海に身を投げることを考えた。そうして、なぜ基康の船がいるうちに、死ななかつたかを後悔した。基康や、あの裏切者の成経や康頼の目前で死んだならば、すこしは腹^{はらい}癒せにも

なるのだったと思つた。今死んでは犬死にであると思つた。が、死のうという心は変らなかつた。帰洛きらくの望みを永久に断たれながら暮していくことは、彼には堪えられなかつた。二十間ばかり向こうの岸に、一つの岩があり、その下の水が、ことさらに深いように見えた。

彼が、決心して立ち上つたとき、彼はふと水の匂いを嗅いだ。

それは、真水まみずの匂いであつた。極度に渴している彼の鼻は、犬のように鋭くなつてゐるのだつた。彼は、水の匂いを嗅ぐと、その方角へ本能的に走り出した。唐竹の林の中を、彼は獣のように潜くぐつた。十間ばかり潜つたとき、その林が尽きて、そこから岩山が聳そびえていた。

ふと、そこに、大きい岩を背後うしろにして、この島には珍しい椰子やしの木が、十本ばかり生えているのを見た。そしてその椰子に覆われた鳶色とびいろの岩から、一条の水が銀の糸のように滴したたつて、それが椰子の根元で、小さい泉になつていているのを見た。水は、浅いながらに澄み切つて、沈んでいる木の葉さえ、一々に数えられた。渴し切つている俊寛は、犬のようにつくばつて、その冷たい水を思い切りがぶがぶ飲んだ。それが、なんとという快さであつただらう。それは、彼が鹿ヶ谷の山荘で飲んだいかなる美酒にも勝まさつていた。彼が、その清冽せいれつな水を味わつている間は、清盛に対する怨みも、島にただ一人残された悲しみも、忘れ果てたようにすがすがしい気持だつた。彼は、蘇よみがえつたような気持になつて立ち上つた。そし

て、椰子の梢を見上げた。すると、梢に大きい実が二つばかり生なっているのを見た。俊寛は、疲労を忘れて、猿のようによじ登った。それを叩き落とすと、そばの岩で打ち砕き、思うさま貪むさぼり食たった。

彼は、生れて以来、これほどのありがたさと、これほどのうまさとで、飲食したことはなかった。彼は椰子の実の汁を吸っていると、自分の今までの生活が夢のように淡く薄れていくのを感じた。清盛、平家の一門、丹たん波ば少しょう将しょう、平たい判はん官がん、丹たん左さ衛えい門もん尉じょう、そんな名前や、そんな名前に対する自分の感情が、この口の中のすべてを、否、心の中のすべてを溶かしてしまうような木の實の味に比べて、まったく空虚なつまらないもののような

気がしはじめた。

俊寛は、口の中に残る快い感覚を楽しみながら、泉のほとりの青草の上に寝た。そして、過去の自分の生活のいろいろな相そうを、心の中に思い出してみた。都におけるいろいろな暗闘、かんせい陥擠、戦争、権勢の争奪、それからくる嫉妬、反感、憎悪。そういう感情の動くままに、きようほん狂奔していた自分のあさましさが、しみじみ分かったような気がした。船を追って狂奔した昨日の自分までが、がき餓鬼のようにあさましい気がした。ほんのう煩惱を起す種のないこの絶海の孤島こそ、自分にとって唯一の浄土ではあるまいか。康頼や成経がそばにいたために、都の生活に対する、否、人生に対する執着が切れなかったのだ。この島を仮のすみかと思えばこそ、

硫黄ヶ岳に立つ煙さえ、焦熱地獄に続くもののように、ものうく思われたのだ。こここそ、ついすみかだ。あらゆる煩惱と執着とを断つて、真如しんによの生活に入る道場だ。そう思い返すと、俊寛は生れ変つたような、ほがらかな気持がした。

ふと、寝がえりを打つと、すぐ自分の鼻の先に、撫子なでしこに似た真つ赤な花が咲いていた。それは、都人みやこびとの彼には、名も知れない花だった。が、その花の真紅しんくの花弁が、なんとという美しさと、清らかさを持つていたことだろう。その花を、じつと見詰めてみると、人間のすべてから知られないで、美しく香つてにおいる、こうした名も知れない花の生活といったようなものが考えられた。すると、孤島の流人である自分の生活でさえ、むげに生甲斐のない

ものだとは思われなくなつた。彼は、自殺しようとした自分の心のあさはかさを恥じた。彼の心には、今新しい力が湧いた。彼は勇躍して立ち上つた。そして、海岸へ走り出た。いつもは、魂も眩くらむようにものうく思われた大洋が、なんと美しく輝いていたことだろう。十分昇り切つた朝の太陽のもとに、紺碧こんぺきの潮が後から後から湧くように躍つていた。海に接している砂浜は金色こんじきに輝き、飛び交うている信天翁あほうどりの翼から銀の光を発するかと疑われ、いつもは見ることを厭つていた硫黄ヶ岳に立つ煙さえ、今朝は澄み渡つた朝空に、琥珀色こはくいろに優にやさしくたなびいている。

俊寛は、童わらべのようなのびやかな心になりながら、両手を差し広げ、童のように叫びながら自分の小屋へ駆け戻つた。

島に来て以来一年の間、俊寛の生活は、成経や康頼との昔物語から、謀反の話をして、おしまいにはお互いの境遇を嘆き合うか、でなければ、砂丘の上などに登りながら、波路遥かな都を偲しのんで溜息をつきながら、一日を茫然と過ごしてしまふのであつたが、俊寛はそうした生活を根本から改めようと決心した。

彼は、つとめて都のことを考えまいとした。従つて、成経や康頼のことを考えまいとした。彼は、成経や康頼が親切に残して置いてくれた狩衣かりぎぬや刺貫さしつらを、海中へ取り捨てた。長い生活の間

には、衣類に困るのは分かりきっていた。が、困ったら、土人のように木の皮を身に纏まとうても差支えないと考えた。

その上、三人でいた間は、肥前ひぜんの国加瀬くにかせの荘しょうにある成経しゆうとの舅おぢから平家の目を忍んでの仕送りで、ほそぼそながら、朝ちよう夕せきの食おみやびとに事を欠かなかつた。そのためでもあるが、三人は大宮人の習慣おみやびとを持ちつづけて、なすこともなく、毎日暮くしていた。俊寛は、そうした生活を改め、自分で漁すなどりし、自分で狩たがりし、自分で耕たがすことを考えた。

彼は、そういう生活に入る第一歩として、成経や康頼の記憶がつきまどっている今までの小屋を焼き捨て、自分で発見したあの泉ほとりの畔ほとりに、新しい家を自分で建ててることを考えた。

彼は、その日から、泉に近い山林へ入って、木を伐った。彼が持つている道具は、一挺の小さい鉞まさかりと二本の小太刀であつた。周囲が一尺もある木は、伐り倒すのに四半はんどき刻近くかかつた。が、彼が額ひたいに汗を流しながら、その幹に鉞を打込むとき、彼は名状しがたい壮快な気持がする。清盛に対する怨みなどは、そうした瞬間、泡のように彼の頭から消え去っている。そして、その木が鉞の幾いくらつか落下によつて、力尽き、地を揺がせて倒れるとき、俊寛の焼けた顔には、会心の微笑えみが浮ぶ。彼は、そうして伐り倒した木の枝を払い、一本ずつやつとの思いで、泉の畔に引いてくる。彼は、その粗ラフな丸太を地面に立て、柱とした。小太刀や鉞で穴を掘ることは、かなり骨が折れた。ことに、そういう仕事に用いるこ

とで、これから先の生活にどんな必要であるかもしれない道具が破損することを、恐れねばならなかった。屋根は、唐竹で葺いた。この島の大部分を覆うている唐竹は、屋根を葺くするには、藁よりもはるかに秀れていた。木の枝を、横にいくつも並べて壁にした。そして、近所から粘ねばい土を見出して、その上から塗抹とまつした。彼は、この新しい家を建てるために、二十日ばかりもかかった。が、彼は自分の住む家を自分で建てるのが、どんなに楽しみの仕事であるかが分かった。その間、清盛に対する怨みや、妻子に対する恋しさが、焼くように胸に迫ることがある。そんなとき、彼は常よりも二倍も三倍も激しく働く。むろん、島に夕暮が来て、日がこうりよう荒よう寥ようたる硫黄ヶ岳のかなたに落ち、唐竹の林に風が騒ぎ、名

も知れない海鳥が鳴くときなど、灯もない小屋の中に蹲うづくまっている俊寛に、身を裂くような寂しさが襲ってくる。が、昼間の激しい労働が産む疲労は、すぐ彼をそうした寂しさから救ってくれ、そして彼に安らかな眠りを与えてくれる。

新しい小屋ができたとき、彼はその次には、食物のことを考えた。三人で食い残した乾飯ほしいは、まだ二月、三月は、俊寛一人を支えることができた。が、成経がいなくなった今は、成経の舅から仕送りがあるはずはなかった。今は、自分で食物を耕し作るよりほかはなかった。俊寛は、新しい小屋から、二町ばかり隔った所に、やや開けた土地があり、硫黄ヶ岳に遠いために硫黄の気がすこしもないことを知った。

彼は、そこを冬の間の開墾し、春が来れば麦を植えようと思つた。が、差し当つては、すなど漁りと狩をするほかに、食料を得る道はなかつた。

彼は、けんろう堅牢な唐竹を伐つて、それにつる蔓を張つて弓にした。矢は、細身の唐竹を用い、矢尻は鋭い魚骨を用いた。本土ならば、こうした矢先にかかる鳥は一羽もいなかつただろうが、この島に住んでいるさとばと里鳩、からばと唐鳩、あかひげ赤髭、あおさぎ青鷺などは、俊寛の近づくのをすこしも恐れなかつた。半日、山や海岸を駆け回ると、運び切れないほどの獲物があつた。

今までの彼は、狩はともかく、すなど漁りはむげに卑しいことだと思つていた。ひたすらに都会生活に憧れていた彼は、そうしたこと

を真似てみようという気は起らなかった。が、現在の彼は、土人に習って漁りをしてみようと考えた。その頃の島は、鰻うなぎを取る季節であつた。永良部鰻えらぶうなぎは、秋から冬にかけて島の海岸の暖かい海水を慕つて来て、そこへ卵を産むのであつた。土人は、海水の中に身を浸してそれを手捕りにした。俊寛も、それに習つた。最初は、いくど掴つかんでも掴み損ねた。土人は、あやしい言葉で何かいながら、俊寛をわらつた。が、俊寛は屈しなかつた。三日ばかりも、根よく続けて試みているうちに、魯鈍ろどんで、いちばん不幸な鰻が、俊寛の手にかかる。五日と経ち、七日と経つうちに、どんな敏捷な鰻でも俊寛の手から逃れることができなくなつてくる。彼は、何十匹と獲えた鰻のあごに蔓を通し、それを肩に担ぐ。蔓が、

肩に食い入るように重い。が、自分が獲ったのであると思うと、一匹だつて、捨てる気はしない。小屋へ歸つてから、彼は小太刀で腹を割き、腸を去つてから、それを日向へ乾す。半月ばかり鰻を取っているうちに、小屋の周囲は乾した鰻でいっぱいになる。そのうちに、鰻の取れる季節は、過ぎ去つてしまう。そして、冬が来た。冬の間、俊寛は畑を作ることに、一生懸命になった。彼は、まず畑のために選定した彼の広闊な土地へ、火を放った。そして、雑草や灌木を焼き払った。それから、焼き残った木の根を掘返し、岩や小石を取去った。彼の鉞は、今度は鋤の用をしした。道具がないために、彼の仕事は捗らなかつた。土人の所に行けば、鋤に似たものがあるのを知っていた。が、報酬なしに土人

が何物をも貸さないことを知っていた。が、彼の精根は、そうしたものに、すべて打ち克かつた。冬の終る頃には、一町近い畑が、彼の力に依よつて拓ひらかれた。彼に今最も必要なことは、そこに蒔まかねばならない麦の種であつた。彼は、麦の種を土人が手放さないのを知っていた。彼は、それと交こう易えきするために、自分の持物の中で、土人の欲ほしがりそうなものをいろいろ考えてみた。土人の欲ほしがりそうなものは、自分の生活にも欠くべからざるものだつた。俊寛は、ふと鳥羽とばで別れるとき、妻の松の前から形見かたみに贈られた素絹しろぎぬの小袖を、今もなおそのままに、持っているのに気がついた。それは、現在の彼にとつて、過去の生活に対する唯一の記念物だつた。彼は、一晩考えた末、この過去の生活に対する記

念物を、現在の生活の必須品ひつすひんに換えることを決心した。彼は、いとしい妻の形見を一袋の麦に換えた。そして、それを彼が自分で拓いた土地に、蒔いた。

自分で拓いた土地に、自分の手で蒔いた種の生えるのを見ることは、人間の喜びの中では、いちばん素晴らしいものであることを、俊寛は悟った。ほのかな麦の芽が、礮ぎょうかくな地殻からおぞおぞと頭を擡もたげるのを見たとき、俊寛は嬉し涙に咽むせんだ。彼は跪ひざまずいて、目に見えぬ何物かに、心からの感謝を捧げたかった。

鬼界ヶ島にも春はめぐってくる。島の周囲の海が、薄紫に輝きはじめる。そして、全島には、椿つばきの花が一面に咲く。信天翁あほうどりが、一日一日多くなつて、硫黄ヶ岳の中腹などには、雪が降つたよう

に、集っている。

生れて初めてのの自然生活は、俊寛を見違えるような立派な体格にした。生白かった頬は、褐色に焼けて輝いた。去年、着続けていた僧侶の服は、いろいろのことをするのに不便なので、思い切つてそれを脱ぎ捨て、思い切つて皮かつらを身にまとつた。生年三十四歳。その壮年の肉体には、原始人らしいすべての活力が現れ出した。彼は、生え伸びた髪を無造作に藁わらで束ねた。六尺豊かの身体は、鬼のような土人と比べてさえ、一ひと際ま立ち勝つて見え

た。
彼は、時々自分の顔を、水みづ鏡かがみで映して見る。が、その変り

はてた姿を、あさましいなどと思つたことはない。むしろ現在の

彼には、妻子が時々思い出されるだけで、清盛のことなどは、念頭になかった。平家が、千里のかなたで奢おごつていようがいまいが、そんなことは、どちらでもよかった。それよりも彼は、自分が植えつけた麦が成長するのが、一日千秋の思いで待たれた。

麦の畑に生おうる雑草を取ることは、彼の半日の仕事として、十分だった。が、午後からは海岸へ出て、毎日のように鰯ぶりを釣った。糸は太い蔓つるを用い、針は獣の骨で作った。三、四尺の大魚は、針を入れると同時に、無造作に食いつく。それを引き上げるのが、どんなに壮快であつただろう。それは、魚と人間との格闘であつた。俊寛は危うく海の中へ、引きずり込まれそうになる。それを、岩角へ足をふんばつて、ぐつと持ち堪こたえる。魚はそこかかった針

をはずそうとして、波間で白い腹をかえしながら身を悶もだえる。そうした格闘が、半刻近くも続く。そのうちに、魚の力が弱つてくる。それでもなお、身体を激しく捻ねじ曲げながら、水面に引き上げられる。

この豪快な鰯約が、この頃の俊寛にとつては、仕事でもあり、娯楽でもあつた。四尺を越す大魚を三、四匹繋いで、砂の上を小屋まで引きずつて帰るのは苦しい仕事であつた。が、それを炙あぶると、新鮮な肉からは、香ばしい匂いが立ち、俊寛の健けん啖たんな食欲をいやが上にも刺激する。

彼は、毎日のように、近所の海角うみかどに出て、鰯を釣つた。彼は、その魚から油を取つて、灯火ともしの油にしようと考えたのである。

鰯は、群を成して島の周囲をめぐるにいた。俊寛は、その群を追うて、自分の小屋から一里近くも遠方へ出ることもあった。

その日も、俊寛は、鰯を釣るために硫黄ヶ岳のすぐ麓の海岸まで行った。そこからは土人の部落が、半里とも隔っていないかった。土人たちは、本土の人間を恐れ嫌った。三人でいたときは、土人たちは遠方から三人の姿を見ると、避けた。俊寛一人になってからは、恐れはしなかった。が、一種気味の悪いもののように、決して近づいては来なかった。俊寛も、なるべく土人と交渉することを避けた。土人の部落へは、できるだけ近寄らないようにしたが、その日は、近所の海岸には、鰯の姿が見えないため、それを探しながら、とうとう、土人の部落近くまで来てしまった。

彼の針に、その海岸で、今まで上ったことのないような大魚がかかった。それは、鰯としても珍しい五尺を越える大魚だった。彼は、その岩角で、一刻近くも、それを釣り上げるために、奮闘した。彼は魚が逸しようとするときには、それに逆さわらないように手の中の蔓を延ばした。もう延ばすべき蔓がなくなると、蔓は緊張して、水を切りながらキイキイ鳴った。

彼は、魚が頭が自分の方へ向けたと知ると、その機を逸しないで、蔓を手早く手元へ繰り寄せる。一間ばかりの水底まで来た魚は、奇怪な姿を見せながら、狂い回る。が、水際までは決して上らない。そして、俊寛の手が、少しでも緩ゆるむと矢のように、沖へ逸走する。彼は蔓を延ばしたり、緩めたりすることによって、水

中の魚を疲らせようとする。半裸体のまま岩頭に立って活動する俊寛の姿は、目ざましいものであった。

とうとう、俊寛はその五尺を越ゆる大魚を征服してしまう。岩の上に釣り上げられた後も、なお跳躍して海に入ろうとする魚の頭を、俊寛はそばの大石で一打ちする。魚は尾や鰭ひれを震わせながら、死んでしまう。俊寛は、その二十貫を越える大魚の腹に足をかけながら、初めて会心の微笑をもらす。

その時俊寛は、ふと人の気配を感じた。魚を釣るために、夢中になっていた俊寛は、気がついて周囲を見回した。見ると、いつの間近寄つたのだろう。一人の土人の少女が、十間ばかりの後方に立ちながら、俊寛の姿をじっと見詰めているのだった。おそ

らく俊寛の勇ましい活躍を先刻から見ていたのだろう。

年は、十六、七であつたろう。が、背丈せたけはすすくと伸びて、都の少女などには見られないような高さに達していた。腰の周圍に木の皮を纏まとつただけで、よく発達した胸部を惜し気もなく見せていた。髪は梳くしけずらず、蔓草をさねかずらにしていた。色は黒かつたが、瞳が黒く人なつこく光っていた。

長い間、女性と接したことの無い俊寛は、この少女を一目見ると、自分の裸体が気恥かしくなつて、思わず顔が赤くなつた。が、相手が少しの猜疑さいぎもなく、無邪氣に自分を凝視ぎようししているのを見ると、俊寛はそれに答えるように、軽い微笑を見せずにはいられなかつた。少女は微笑はしなかつたが、そのもの珍しげに瞠みはつて

いる目に、好意を示す表情が動いたことは確かだった。俊寛は、久しぶりに人間から好意のある表情を見せられたので、胸がきゅつとこみ上げてくるように感じた。

彼は、再び針を海中に投じた。魚は、すぐ食いついた。その魚を引き上げる間、少女は熱心に見物している。そして第三番目の針を投じて、少女は去らない。俊寛は、少女の方を振向きながら時々、微笑を見せる。少女は、硫黄いおうを採るために来たのだろう。が、硫黄を入れる筈はこをそばへ置き捨てたまま、いつまでも俊寛が鰯を釣り上げるのを見ている。

とうとう夕暮が来た。俊寛は、釣り上げた魚を引きずりながら、自分の小屋への道たどを辿る。一町ばかり歩いて、後を振返った。少

女も家路いえじに向おうとして立ち上っている。が、歩き出さないで、俊寛の方を、じつと見詰めている。

俊寛は、その日から自分の生活に新しい希望が湧いたことに気がつく。彼は、その翌日も同じ場所に行った。すると、昨日の少女が、昨日彼女が蹲うづくまっていたのと同じ場所に蹲うづくまっているのを見る。俊寛の胸には、湧き上るような欣よろこびが感ぜられる。今日こそ、昨日よりもっと大きい鰯を釣り上げて少女に見せてやろうと思う。が、昨夜の間に、鰯はこの海岸を離れたとみえ、いくら針を投げても、手答えがない。

彼はいらいらして、幾度も幾度も針を投げ直す。が、幾度投げ直しても、手答えがない。彼は、少女が退屈して、立ち上りはし

ないかと思うといらいらしってくる。が、少女はじつと蹲ったまま身動きもしない。俊寛は、ほかの釣場所を探ろうと思うけれども、少女がもし随ついてこなかったらと思うと、この場所を動く気はない。そのうちに、俊寛は疲れて、針を水中に投じたまま、手を休めてしまう。

その時に、突然かの少女が叫び始めた。俊寛は、最初彼女が、何か自分に話しかけているのではないかと思った。が、少女は天の一方を見詰めながら叫んでいる。そのうちに、俊寛は、その叫び声の中に、ある韻いんりつ律があるのに気がつく。

そして、この少女が歌をうたっているのだということが分かる。それは朗ろうえい詠いや今いまよう様などは違って、もっと急調な激しい調子

である。が、そのききなれない調子、意味のまったく分からない詞ことばの中に、この少女の迫った感情が漲みなぎっているのを俊寛は感ぜずにはいられなかった。

俊寛は、やるせなくこの少女がいとしくなる。歌い終ると、少女は俊寛の方へその黒い瞳の一瞥べっを投げる。俊寛はたまらなくなつて立ち上り、少女の方へ進む。すると、今まで蹲っていた少女は、急に立ち上つて五、六間向うへ逃げる。が、そこに立ち止まつたまま、それ以上は逃げようとはしない。俊寛は、微笑をしなから手招きする。が、少女は微笑をもつてそれに答えるけれども、決して近寄らない。俊寛は、じれて元の場所へ帰る。すると、少女も元の場所へ帰つて蹲る。そして、時々思い出したように歌い

つづける。

その翌日も、俊寛は同じ場所に行つた。その翌々日も、俊寛は同じ場所へ行つた。もう鱒を釣る目的ではなかつた。

幾日も幾日も、そうした情景が続いた後、少女はどうとうその牝鹿めしかのようにしなやかな身体を、俊寛の強い双腕もうでに委してしまつた。

俊寛は、もう孤独ではなかつた。かの少女は、間もなく俊寛のために、従順な愛すべき妻となつた。むろん、土人たちは彼らの少女を拉らっしたのを知ると、大挙して俊寛の小屋を襲つて来た。二十人を越す大勢に対して、すこしも怯ひるむところなく、鉞まさかりをもつて立ち向つた俊寛の勇ましい姿は、少女の俊寛に対する愛情を増す

のに、十分であつた。が、恐ろしい惨劇さんげきが始まろうとする刹那、少女はいちはやく土人の頭かしららしい老人の前に身を投じた。それは、少女の父であるらしかつた。老人は、少女から何事かをきくと、怒り罵ののしる若者たちを制して、こともなく引き上げて行つた。

その事件があつた後は、俊寛の家庭には、幸福と平和のほかは、何物も襲つて来なかつた。

手助けのできた俊寛は、自分たちの生活を、いろいろな点でよくしていった。都会生活の経験のよいところだけを妻に教えた。無知ではあつたが、利発な彼女は俊寛のいうことを理解して、すこしずつ家庭生活を愉快にしていつた。

結婚してからすぐ、俊寛は、妻に大和言葉やまとを教えはじめた。三

月経ち四月経つうちには、日常の会話には、ことを欠かなかつた。蔓草のさねかずらをした妻が、閑雅かんがな都言葉を口にするには、俊寛にとつて、この上もない楽しみであつた。言葉を一通り覚え、てしまうと、俊寛は、よく妻を砂浜へ連れて行つて、字を書くことを教えた。浅香山あさかやまの歌を幾度となく砂の上に書き示した。

妻は、その年のうちに、妊娠した。こうした生活をする俊寛にとつて、子供ができるということは普通人の想像も及ばない喜びだつた。俊寛は、身重くなつた妻をな嘗めるように、いたわるのであつた。翌年の春に、妻は玉のような男の子を産んだ。子供ができてからの俊寛の幸福は、以前の二倍も三倍にもなつた。

俊寛の畑は毎年よく実つた。彼は子供ができたのを機会に、妻

に手伝わせて、小屋を新しく建て直した。もう、どんな嵐が来ても、びくともしないような堅牢なものになった。

男の子が生れたその翌年に、今度は女の子が生れ、その二年目に、今度はまた男の子が生れた。子供の成長とともに、俊寛の幸福は限りもなく大きくなっていった。鬼界ヶ島に流されたことが、自分の不運であつたか幸福であつたか分からない、とまで考えるようになっていた。

四

有^{あり}王^{おう}が、故主の俊寛を尋ねて、都からはるばると九^{こく}国に下り、

そのこの便船を求めて、硫黄商人の船に乗り、鬼界ヶ島へ来たのは、
 文治二年ぶんじの如月きさらぎ半なばのことだった。

寿永四年じゆえいに、平家の一門はことごとく西海さいかいの藻屑もくずとなり、

今は源家の世となつているのであるから、俊寛に対する重科も自然消え果てて、赦免の使者が朝廷から到来すべきはずであつたが、世は平家の余類追討に急がわしく、その上、俊寛は過ぐる治承三年に、鬼界ヶ島にて絶え果てたという風聞さえ伝わっていたから、俊寛のことなどは、何人なんびとの念頭にもなかつた。

ただ、故主を慕う有王だけは、俊寛の最期を見届けたく、千里の旅路に、憂うき艱難かんなんを重ねて、鬼界ヶ島へ下つたのである。

島へ上陸した有王は、三日の間、島中を探し回つた。が、それ

らしい人には絶えて会わなかった。島人には、言葉不通のため、ききあわすべき、よすがもなかった。そのうちに、便乗してきた商人船の出帆の日が迫った。今は俊寛が生活した旧跡でも見たいと思つて、人の住む所と否とを問わず、島中を縫うように駆け回つた。

四日目の夕暮、有王は人里遠く離れた海岸で、人声を聞いた。それが思いがけなくも大和言葉であつた。有王は、林の中を潜つて、人声のする方へ行つた。見ると、そこは、ひろびろと拓かれた畑で、二人の男女の土人が、並んで耕しているのであつた。しかも、彼らは大和言葉で、高々と打ち語つているのであつた。有王は、おどろきのあまりに、畑のそばに立ち竦すくんでしまつた。有

王の姿を見たその男は、すぐその鍬を捨ててつかつかとそばへ寄つて来た。

その男は、じつと有王の姿を見た。有王も、じつとその姿を見た。その男の眉の上のほくろを見出すと、有王は、

「俊寛僧都そうすどのには、ましまさずや」

そう叫ぶと、飛鳥のように俊寛の手元に飛びすが縋つた。

その男は、大きく頷いた。そして、その日に焼けて 赤銅しゃくどうのように光っている頬を、大粒の涙がほろほろと流れ落ちた。二人は涙のうちに、しばらくは言葉がなかつた。

「あなあさましや。などかくは変らせたまうぞ。法勝寺ほうしょうじの執しぎよ行うとして時めきたまいし君の、かくも変らせたまうものか」

有王は、そう叫びながら、さめざめと泣き伏した。が、最初いこう邂逅の涙は一緒に流したが、しかしその次の詠嘆には、俊寛は一致しなかった。俊寛は逞しい腕を組みながら、泣き沈む有王の姿を不思議そうに見ていた。

彼は、有王が泣き止むのを待って、有王の右の手を掴つかんで、妻を磨さしまねくと、有王をぐんぐん引張りながら、自分の小屋へ連れて帰った。有王は、その小屋で、主しゅに生き写しの二人の男の子と三人の女の子を見た。俊寛は、長男の頭を擦さすりながら、これが徳寿とくじゆ丸まるであるといつて、有王に引き合せた。その顔には、父らしい嬉しさが、隠し切れない微笑となつて浮んだ。

が、有王はすべてをあさましいと考えた。村上天皇の第七子具と

もひらしんのう せいのごうそん
平親王六世皇孫である俊寛が、南蛮の女と契ちぎるなどは、
何事であろうと考えた。彼は、主あるじが流人になつたため、心までが
畜生道に陥ちたのではないかと嘆き悲しんだ。

彼は、その夜、夜を徹して俊寛に帰洛きらくを勧めた。平家に対する
謀反の第一番であるだけに、鎌倉にある右府うふどのが、僧都の御身
の上を決して疎おろそかには思ふまいといった。

俊寛は、平家一門が、滅んだときいたときには、さすがに会心
の微笑えみをもらし、妻の松の前や鶴の前が身まかつたということをし
きいたときには、涙を流したが、帰洛の勧めには、最初から首を
横に振つた。有王が、涙を流しての勧説かんぜいも、どうすることもで
きなかつた。

夜が明けると、それは有王の船が、出帆の日であつた。有王は、主の心に物もの怪のけが憑ついたものとして、帰洛の勧めを思い切るよりほかはなかつた。

俊寛は、妻と五人の子供とを連れながら、船着場まで見送りに来た。

そこで、形見にせよといつて、俊寛が自分で刻んだ木像をくれた。それは、俊寛が、彼自信の妻の像を刻んだものだった。俊寛の帰洛を妨げるものは彼の妻子であると思うと、有王はその木像までが忌いまわしいものに思われたが、主の贈物をむげにしりぞけるわけにもいかなないので、船に乗ってから捨てるつもりで、何気なくそれを受取つた。

別れるとき、俊寛は、

「都に帰ったら、俊寛は治承三年に島で果てたという風聞を決して打ち消さないようにしてくれ。島に生き永らえているようなことを、決していわないようにしてくれ。松の前が、鶴の前が生き永らえていたらまた思うようもあるが、今はただひたぶるに、俊寛を死んだものと世の人に思わすようにしてくれ」

そんな意味をいった。その大和言葉が、かなりなまり訛が激しいので、有王は言葉通りには覚えていられなかった。

有王の船が出ると、俊寛及びその妻子は、しばらく海辺に立つて見送っていたが、やがて皆は揃って、彼らの小屋の方へ歩き始めた。五人の子供たちが、父母を中に挟んで、嬉々として戯たわむれな

がら帰って行く一行を、船の上から見ていた有王は、最初はそれを獣か何かのひとむれ群のようにあさましいと思っていたが、そのうちになんとも知れない熱い涙が、自分の頬を伝っているのに気がついた。

青空文庫情報

底本：「菊池寛 短編と戯曲」文芸春秋

1988（昭和63）年3月25日第1刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：真先芳秋

校正：大野 晋

2000年8月28日公開

2005年10月14日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

俊寛 菊池寛

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>